

クリスマスメッセージ

クリスマス、プレゼントは希望

上田亜樹子 (立教女学院チャプレン)

病弱だった母が亡くなった年のクリスマスイブのこと。学校帰りの弟と私は夕刻、父と川崎駅で待ち合わせ、キャンドルサービスに3人で行こうとしていました。仏教徒であった母の両親が教会の近くに住んでいたこともあり、それまでは教会に行く前に祖父母の家に寄り、夕食のテーブルを一緒に囲んでから急いで礼拝に向かったものでしたが、その年は祖父母も悲しくてそんな気持ちになれなかったのでしょうか。「私たちは早く寝るから、今年は来ないで」と告げられていました。その晩、駅で待ち合わせた父と弟と私は、立ち食いそばのカウンターに3人並び、黙ってうどんをすすりました。うどんは温かだったけれど、足元は寒かった、そんな記憶が残っています。とりあえずお腹は空いていたので美味しかったけれど、心の空白はどうしていいのかわからなかったあの晩、寒い夜の街に響くクリスマスソングや奇麗なイルミネーション、お店からあふれてくる美しい灯りや飾り付けなど、まるで自分とは関係のない遠い世界の出来事のように感じました。人々のところにはクリスマスが来るけれど、こんなふうに痛みで塞がった私の心には、クリスマスなんて来るわけがない、クリスマスのお祝いなんて関係ない、そんな気持ちだったように思います。

「世界ではじめのクリスマスは」という讃美歌がありますが、聖書に描かれたクリスマスの物語はどうだったのでしょうか。実際、イエスさまが誕生した時代は、痛みと心の寒さに満ちあふれた社会だったと言えるでしょう。例えば聖書に病人がたくさん登場しますが、貧しい家庭の誰かが病気になっても医者に行くことは無理だった場合、高熱の子どもも、皮膚が剥がれた大人も、息が苦しい老人も、治ることを諦めない限りは、じっと横になって災いが過ぎるのを待つしかありませんでした。そして、病気の苦しみに加え人々をさらに苦しめたのは、様々な苦痛は「神からの罰」という常識があったことです。つまり、「因果応報」に似た考えで、辛い境遇に直面する原因は本人や家族にあり、不幸な出来事に遭う事実も、神さまの恵みから離れている証拠なので免れることのできない運命と教えられていました。さらに人々は、ずっと他国の支配を

受けてきましたから、社会的な不平等や差別についても諦めかけていました。一生懸命働いても生活が安定せず、病気や怪我にもならず成長した息子も兵隊にとられて戦死し、納めた税金が足りなかった故に愛娘が売り飛ばされる、そんな暮らしが続くと、生きることについて何の意味があるのか、と嘆くより他にない人生が想像されます。

苦しみに出遭ってしまうのは、いわゆる「バチ」ではないし、恵みに漏れている証拠でもない、大切に愛されている人であっても、苦しみに遭うことはある、と神さまは伝えようとしてきました。しかし人々はそれを理解しなかったのでここは一大決心、神さまのひとり子をこの世に送り出すことにしました。生まれたその赤ん坊は成長すると、苦しみを抱えた人々に手を伸ばし、痛みを理解しようとし、どんな人にも神の恵みと慈しみが注がれていることを告げ、ひとりぼっちではないことを宣言していきます。つまりクリスマスは本来、解決のつかない痛みや痛みの中にある人のために用意された、神さまからの究極のプレゼントではないかと思うのです。

40年前に寒い心でうどんをすすった私たちにとって、クリスマスは関係なかったどころか、私たちに向けられた神さまからの大切なメッセージであったと、今は思うことができます。楽しくお祝いできる時だけでなく、痛みや生き難さ、痛みを抱えている人々に備えられたクリスマス、その喜びがあなたにも届きますように！